

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	19101010	研究期間	平成19年度～平成23年度
研究課題名	東南アジアで越境する感染症：多角的要因解析に基づく地域特異性の解明	研究代表者 (所属・職)	西淵 光昭（京都大学・東南アジア研究所・教授）

【平成22年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

腸炎ビブリオ感染症について、新型菌が二枚貝の流通ルートの拡大によって発生しており、中国系とイスラム系の貝の加熱に関する食習慣の相違で発生状況が異なることを解明するなど、多様なディシプリンをもつ研究者による文理横断型の共同研究として、国際的にも注目される成果を挙げている。当初目標に向け概ね順調に進展しており、コレラ菌に関して所期の研究が進まなかったことは、チクングニヤ熱についての研究など、当初の計画にはなかった研究の展開で十分にカバーされている。研究成果の公表、社会的還元も精力的に展開されており、今後の計画も具体的で、期待どおりの成果が期待できる。今後は、東南アジアにおける食品衛生、食品に関わる環境衛生について貢献できるようなスキームが提示されることが望まれる。

【平成24年度 検証結果】

検証結果	本研究は、東南アジアという広大な地域の感染症を対象にして、政治・経済・宗教・民族など複雑で急速に変化する状況を背景に、個々の地域の実態の観察と、細菌学的な考察を組み合わせたものである。人と物の移動と、人々の生活が関心の中心にあり、プランテーションへの国境を超えた労働者の移動と移民の法的脆弱性、貝やエビなどの食品、ある種の O157 菌に対する免疫の濃淡、観光を媒介にした国際的流行など、数多くの文理横断的で重要な知見が得られた優れた研究であり、これからの学際的な研究の範例となるものである。
A	研究成果報告書の記述を読んだ範囲で、不足していると思われる視点をあえて挙げると、歴史や時系列分析の視点が欠けており、分析が直近の現代に限られた静的なものになっている印象を持つ。労働移動や商品の流通についての時系列分析を含んだ疫学研究となると、さらに説得力がある研究になるであろう。